

方々に対する心理面や健康面の配慮をどのようにしたか、というようなことでも、大変ユニークな論文になると思います。

そういう論文はまさに職業能力開発分野のものであって、日本ではいま事業団がやらなければ、他に手掛けるところはないだろうという気がします。

城 職業能力開発という分野を専門に行っている集団は、事業団が唯一ではないとしても、最大の集団であることは間違いないので、そういう意味でわれわれが何かをなすべき必要があると思います。

室田 ホワイトカラーの能力開発にしる女性の能力開発にしる、その方々をどうやって職業能力開発施設で受け入れ、付加価値能力を付けたらいいのかということが私たちの役目だと思うのですが、たとえば、日本労働研究機構等を出している雑誌や報告書は、かなり人間に寄った調査や資料として問題点を捉える上で参考になります。それから先をわれわれは、職業能力開発に携わる現場として、訓練の問題として具体的に取り組んでいく。それが、ポリテクセンター等の役割です。そういうものを踏まえて訓練のあり方を展開していけば、りっぱな“論”になると思います。また、少数精鋭主義の訓練ならいいなどといわれるが、どこがいいのか、こういう点を実証的に検証していく。そういう検証は、今ほとんどやっていない。現場としては、非常に立派な“論”になると思っているのですが。

それから困ったことに、教育の論文はどなたでもくちばしが入られる。工学等とは違って、教育は誰でも持論を持っていますから、こんなことは私は違うと思う、というようなことになりまして大変困ってしまふ。かといって、データを出すには、人間相手ですから、何年かデータを拾わなければ成果は出てこないの辛い。そういう点を、事業団本部を含めて関係者一同が、多少辛抱しながらも、この分野を育てていくことが必要だと思います。

そうしないと、報文誌の投稿や掲載の状況は今後も変わらずに現在の傾向が続いてしまうのではないのでしょうか。

小林 能力開発セミナーのような内容で、報文誌へ投稿するにはどのように考えたらいいのでしょうか。

室田 能力開発セミナーのコース開発に関しても、今グループでやらせているのですが、プロセスをちゃんと記録しておくように言っています。新しいコース開発と言っても、やはり相手のニーズがあるし、こちらのキャパシティもある、教材教具の問題もある。ですから、そのコースを開発した場合に延べ何人くらい



をこの地域で獲得できるのかという見通しも持って、新規コースは開発されるはずなので、漠然と委員会をやって、さあいいコースができましたでは困るのです。

極端に言えば、グループが幾人で、どういう段階でこういう検討を加えてきて、ということをきちんと整理して、あと少し手を加えれば新規コースに対する一考察はいい論文になると思います。

これは日常ルーチン作業で今やっているのだから、記録さえ取っておいて、あとはきちんと整理をすれば論文というのは形になりますので、そのような形にしたらどうですか、と話をし、指導課長を中心にやってもらっているのです。そういうものがまともれば参考になるだろうと思っています。

また、教材を作るという時にどういう必要があって、どういうプロセスで、どのくらいのマンパワーをかけてこの教材ができたかということ記録し、それをやれば、こうやって教材というのは開発するものだと思われるだろうという、なかなか立派な“論”になるだろうと思っています。

日常の中の作業にきちんと埋め込んであげないといけない。ポリテクセンター等は特別な時間を取って研究をするわけではないですから。むしろ、そういう仕掛けをしなればいけないかな、という感じがしているのです。

青柳 ポリテクセンターの職員は研究職ではありませんから、日頃の業務の中での成果を論文としてまとめるためのアドバイスが重要ということですね。

室田 ポリテクセンターでは、いわゆる研究者として先生方を位置づけているわけではない。やはり、指導する立場です。指導は幅広く、コース開発を含めたり、企業との相談・援助をしたりという中で成り立っています。そういう中で、かなり大事な問題はあるけれどもそれを急に“論”にはまとめられない段階があると思うのです。

ポリテクセンターの職員は、研究者集団ではなく、教育訓練の広い意味のアドバイザーであり、コーディネーターであり、しかもインストラクターであるとい

う人間集団です。

そういう自分がやった仕事が“論”になるような方向に持っていかなければ、ポリテクセンターからはなかなか投稿されないだろうと思います。逆に、ポリテクセンターの方々も研究ばかりしては、困ってしまふ。それは目的を逸脱して、具合が悪いことだと思うのです。

(2) 投稿するメリットをつける、広報の充実をする必要性

城 職業能力開発報文誌の投稿を促進するためには、発行の目的をはっきりさせ、かつ、投稿者に対して何らかのメリットをつける、たとえば賞を与えるなどのことはどうでしょうか。

小林 論文賞をだすことも一つの方法ですね。

城 内容的にもう少し読みやすくし、PRをして職員の方々にこの存在を知らしめる。従来の報文誌がすべてではなくて、新しいスタイルを打ち出していく。できれば、モデル論文を出していくというような議論を出していく。なかなか簡単ではありませんが、こういうのを載せるということで、検討していくことが必要でしょう。

印南 各施設が投稿し易くする環境づくりが大切です。例えば、施設長の指導は勿論、各施設に報文誌の担当者を置くというのも1つの方法だと思います。

大西 投稿するメリットが確立すればいいのです。学内でも、いくら呼び掛けてもやらない人はやらないし、やるのはいつも同じ人がやっています。やれるところはやるというので結構ではないですか。そういう意味で自主性が基本であり強制はできないと思います。

6 他の雑誌等との関係

(1) 技能と技術誌や学内紀要との関係

大西 職業能力開発や教育訓練、また、その周辺技術の内容としては「技能と技術」誌が比較的読みやすいと感じます。

学内紀要と報文誌と「技能と技術」誌とはどういう関係になっているのでしょうか。職員の方々は十分にわからないのではないかと思います。この関係がきちんとしてできるなら、分担してやったほうが能率がいいし、見る人にも有用ではないかと思います。

城 「技能と技術」誌も報文誌も基本的には投稿誌ですが、「技能と技術」誌もポリテクカレッジが発足したところから、ポリテクカレッジの先生方からの技術的

内容での投稿が増え、大変難しいものになった経緯があり、工学的専門書風になってしまった時期があります。現在は、なるべく易しくわかりやすく、写真や図をふんだんにし、文字も大きくしました。従って、以前よりはだいぶ読み易い雑誌になっています。

この時期は、報文誌が創刊された時期と同じなのです。つまり、報文誌ができたことにより、「技能と技術」誌が読み易い雑誌となって来たとも考えられます。

大西 「技能と技術」誌のほうが職業能力開発や教育訓練に関する内容が充実しているように思います。

城 「技能と技術」誌には校閲査読はありません。基本的には編集部として編集をしている雑誌です。従って、報文誌編集委員会では、「技能と技術」誌に掲載されたものでも、加筆修正して報文誌へ投稿しても受け付けます。また、各ポリテクカレッジ等における学内紀要に掲載されたものでも同じことが言えます。つまり、新規性はあると判断しています。

(2) 学会誌等との関係

城 ポリテクカレッジの先生方はいろいろな学会等に所属して、学会活動（発表や論文投稿）をしていると思いますが、そうした活動と報文誌との関係はいかがでしょうか。

大西 初めて報文誌を見たときの印象は、何が目的の論文誌なのかわかりませんでした。

テーマや内容が非常に広い領域に亘り、しかもそれぞれがかなり専門的です。

技術的テーマにしても、機械・電気・建築・化学などが入り組んでいます。また、少ないですが教育訓練に関する論文もあります。ですから、個人が資質を向上するためと、専門的に非常に近い方だけが読む、ということでは意味があるのかもしれませんが、たいへん読みにくい雑誌です。事業団のそれぞれの専門家が、いろいろな分野を研究しているということがわかるという意味はあるでしょうが。

自分の専門の成果を大勢の方に読んでもらうということでしたら、工学的専門の論文は学会の専門の雑誌に出して、適切な評価を受けるのがよいでしょう。報文誌の場合、あくまでも事業団内部の論文誌ですから工学的専門の論文としては自己満足になってしまいます。ただ、論文の構成や書き方に不慣れな方が、論文指導を受けるという立場から報文誌へ投稿することは必要でしょうが、ある程度書けるようになれば、専門の学会等へ投稿するべきだと思います。

印南 職業能力開発や教育訓練に関するものでも、現

在は産業教育学会等があるわけですから、やる気次第で学会誌への投稿は可能だと思います。

7 今後の編集や発行スタイル等について

城 今後の報文誌の課題と抱負ということで、まとめてお話をうかがいたいと思います。能開大の教員の中には「報文誌」という名前はなぜあのような名前になっているのか、あまり聞かないネーミングではないかという意見もあります。

室田 最初は総称で使ったのです。報文誌という学会誌みたいのを作らなければならない。というのが始まりです。

大西 総称的に、いろんなジャーナルや、会誌とか会報などがありますね。学会での呼称はみな違いますが、その意味で報文誌ということであればわかります。

室田 報文誌の表紙には「職業能力開発報文誌」で、裏の英語には「BULLETIN OF HUMAN RESOURCES DEVELOPMENT」です。名称はこれを継続していくべきでしょう。

大西 1年2冊発行する内、1冊は工学的専門的なもの、もう1冊は職業能力開発に関するもの、と分けるようなことはどうでしょうか。あるいは、同じ分野や系統のものは出来るだけ並べるようにすることも必要ではないでしょうか。

室田 以前にもそういう案はありました。同じ1冊の中でも真ん中を仕切って、上は工学なら工学、他は教育とか職業能力開発的なものなどという考え方です。

大西 ただ、掲載数が少ないと、分野別にまとめるのもむずかしい。20報とか30報とかあればできるでしょうが。

城 似たような議論は他の研究機関等の雑誌等でもあるはずですが、数が少ないとうまくいかないようです。

大西 装丁についてですが、随分堅いという感じがします。現在は、外国の研究雑誌なども赤や緑など、カラー化して表紙や装丁には配慮しています。堅過ぎると活字を見るだけで読む気がしないようになります。

城 ただし、あんまりケバケバしいのではなくて、色を少しつける。パッと見てこれは何かがわかるようにすることは必要ですが。

それから、今年度からA4版を採用するようという方向ですので、報文誌もA4版でいくという予定です。

大西 雑誌というのはいつか役に立つことがあることが望ましい。「いつか書いてあったな」と思ってさかの

ぼって前のものを調べる。そういうように使うのであれば非常によろしいですね。

小林 コース開発の問題や、教材開発の問題で注目すべき論文が出たときに、その後にそれをもとに何人か集まって討論会を行うようなことをやって掲載するような事もいいと思います。

大西 編集委員会等の討議事項などを書く場や意見欄等を設けるといこともおもしろいのではないかと思います。

城 10号の特別企画として、本日の座談会は開催しましたが、編集委員会の意見として別冊ということになりました。

やはり、編集委員のご意見は従来の報文誌のスタイルをあまり崩したくないとお考えのようですね。ただ、いろいろ知恵を絞って、手に取ってもらって読んでいただくように編集等を検討しなければなりません。読まれないとどうにもなりませんから。

室田 例えば職業能力開発促進法の法的解釈などの分野のものもあっていいと思います。雇対法と能開法の関係等もいい。この雑誌の性格としては大変意味があるでしょう。法解釈の思想体系のような論文があるといいと思うのです。そんなものを含めれば、バラエティに富んでくるだろうと思います。

城 共同執筆の場合、今は表紙に代表者名だけしか出していませんが、平成4年度の編集委員会で、中表紙には共同執筆者の全員を書くといいということになりました。個別のところには全員の名前を出しています。

8 まとめ（今後の課題）

城 本日は、今後の方向も含めていろいろなご意見をいただきました。ここで今回の座談会テーマである「職業能力開発の研究・実践に関する投稿を期待して」をまとたいと思います。

(1) 事業団で実施している職業能力開発事業をノウハウとして蓄積しなければならない。職業能力開発に関係する約3000人の事業団職員集団は職業能力開発の専門家集団であり、社会全体に職業能力開発分野の地位の向上や広く事業の展開を図るためには、このノウハウの蓄積が必要である。

(2) 各人が持っている業務を論理化することにより、公共職業能力開発事業全体の業務の質の向上を図ることが必要である。

(3) 報文誌は、それらの一端を担う論文誌として発展させていかなければならない。

(4) 報文誌の発行目的は、大学レベルの工学的技術論文誌ではないのであって、日頃の日常の業務の中から、地道な提言をしていくことが大切である。

このためには、今日いただいた意見として、あるいは、課題として以下のようなものがあります。

(1) 職業能力開発に関する投稿を促進するキーポイントは、特にポリテクセンターや雇用促進センターの職員からの投稿を増やすことである。いろいろな機会や場を捉えて各方面からの投稿促進を図る必要がある。

(2) 現在は、事業団内部の投稿論文誌であるが、社会全体の職業能力開発にかかわる方々の論文誌とする方向も検討していく必要がある。

最後に、これまで大変ご協力をいただいた編集幹事や編集委員の方々、また大変なご苦勞をいただいた校閲査読委員の方々、そして投稿をいただいた方々に厚く御礼申し上げますと共に、報文誌の充実発展のために今後ともより一層の御協力をいただきたいと存じます。

本日は、大変ご多忙のところご出席をいただき、皆様方に貴重なご意見・ご助言をいただき、まことに有り難うございました。